

No.3007

現代イランにおける宗教性に関する人類学的研究

一橋大学大学院 社会学研究科
博士後期課程
谷 憲一

イラン・イスラーム共和国は1979年の革命以後、イスラームの12イマーム・シーア派を国教としている。これまで、イラン社会におけるシーア派の宗教儀礼、とりわけホセインの追悼儀礼は、単純にイラン社会の伝統に即し、安定的なものとして記述され、儀礼の一般的特徴を前提としながら、儀礼が革命において果たした役割などが議論されてきた。しかし、ホセインの追悼儀礼の様式は、年々躍動的な様式となり、単なる「悲嘆の儀礼」以上の意味や機能を帯びたものとなっている。本活動の目的は、イランの人々の宗教性を理解するため、現地調査を通じて、ムスリムとしての敬虔さを構成する実践、彼らを取り巻く社会的状況、そして彼ら自身による社会への意味づけを解明することであった。

本活動では2年間にわたり、ホセインの追悼儀礼について、身体技法への規制、自傷儀礼をめぐる感性、カルバラー巡礼といったトピックに焦点を当てながら、テヘランを中心としたフィールドワークに基づく調査によってデータを収集し研究を遂行してきた。

本研究を通じて明らかになったのは、まず、ホセインの追悼儀礼の執り行われ方の多様性であった。しかしながら、それを踏まえたうえで見えてくるのは、ホセインの追悼儀礼が、イスラーム化を推し進めるイスラーム共和国体制によるイデオロギー装置としての側面を持つ一方で、人々の自発的な宗教性の発露としての側面も兼ね備えているという両義性であった。すなわちホセインの追悼儀礼は2つの極の間の緊張関係の上に位置づけられるといえる。

また、この儀礼は、現代のイランを取り巻く中東における国際政治の状況や、宗教儀礼の脱暴力化といった普遍的な変化も反映しながら、様式を変えながら続いているということが指摘できる。

なお、これらの成果の一部はすでに学会で発表した。また今後、学会誌への論文投稿及び博士論文のかたちで発表予定である。